

ロシナンテの影 ——「もし魯迅がいま生きていたら」論争ノート——

(東京大学) 代田 智明

I. 発端

つい最近まで私は、近現代中国語の短い文章を探して題材に選び、ある雑誌に毎月小さなコラムを書いてきた。それでちょっといたずら気を出して、この4年間、毎年3月号は、「もし魯迅がいま生きていたら」というテーマを心がけることにしていた。最初は胡風、ついで王朔を取りあげ、昨年の3月は、魯迅の息子周海嬰(1929-)が著した『魯迅与我七十年』(01年)からの引用を用いた。いたずら心のお陰で、たまたま目配りが届いたという棚ぼたでもある。

この書物は、日本でも話題になったが、中国の文化界でもあれこれ取り沙汰され、ちょっとした筆墨の争議を引き起こしている。波乱は「もし魯迅がいま生きていたら」という問題に止まらないのだが、ここではそれに限定しよう。なお一端は、2年あまり前に既に本誌上で触れたし(拙稿02年)、丸山昇がこのテーマを含めて、この間の議論を整理している(丸山03年・04年)。丸山論文は参照して頂くと、解りやすいと思われるが、拙稿と重複する点があることについて、読者にはご了承ください。

まずは、周海嬰該書「もう二言三言」という、本文の付け足し部分を抜き書きしておこう。それは文字にするかどうか、再三躊躇し顧慮したことだが、と前置きされ、許広平親子が日中戦争中に世話になったという羅稷南(1898-1971)の体験のことである。彼の教え子から聞いた伝聞の話であった。

「1957年、毛主席は上海に赴き、短期滞在して、慣例に従い何人かの同郷人を招いてお喋りをして

いた。なかに周谷成[城]などがいたと聞くと、羅稷南氏も湖南の旧友で、座談に加わっていた。皆さんもご存じのとおり、このときちょうど「反右派」に当たり、話題の中味は当然、運動における文化人の処遇がどうなるかに及んだ。羅稷南氏が隙をぬって、毛主席に大胆な仮定の質問をした。もし今日魯迅がまだ生きていたら、どうなっているでしょう。これは宙に浮いたままの大胆な仮説の問題で、人を脅かす性質を潜めていた。[……]思わぬことに毛主席はこれに対し、とても真剣になり、しばらく考え込むと、つぎのように答えた。わしの考えでは(魯迅は)囚われの身でまだ書こうとしているか、大局を察して声を上げようとなないか、どちらかだと。心に引っかかっていた問いかけに、返ってきたのはこのような厳しい回答であった。羅稷南氏はびっくり仰天で、体中冷や汗をかき、これ以上ことばはなかった。彼はこのことを心の中にしまい込み、誰にも漏らさなかったのである」(周海嬰01年、370-371頁)。

あの硬骨の毒舌家魯迅が、いま生きていたらどんなことを発言し、その累でどんな目に遭ったか、ということは、歴史にとって仮定は無意味だとしても、興味深い問いである。まして、その「いま」が「反右派闘争」という人民共和国の肅清運動のさなかにあってはなおさら。

周海嬰によれば、羅稷南はその後重い病となって、この事実を埋もれさすに忍びず、信頼できる教え子に言い残した。その教え子が魯迅の息子である海嬰に伝えたというのである。

この一文はしばらくして、物議をかもした。該書出版の翌年02年に、中国現代文学では謝泳や秋石が、毛沢東研究の分野では、陳晋が反論を書い

たのであった。三人が批判を書いた動機や立場は異なるようだが、基本的な論点は類似している。それは、この逸話は1957年「反右派」のときだと設定されているが、毛沢東の上海滞在時期、魯迅に対する言及と内容、羅稷南との接見の可能性などの条件を実証的に調べると、そうした事実は発見できない。この流伝は実はそれ以前、57年3月に「百花斉放、百家争鳴」を推進したとき、毛沢東が語ったことばと関わるのではないか、というのである。毛沢東の魯迅観を知る上で興味深いので、そのことばを一部引用しておく。一つは3月8日『文芸界との談話』と題する講話である。

「魯迅の雑文に力があるのは、マルクス主義の世界観を持った点にある。私が思うに、魯迅が死んでいなければ、やはり雑文は書くだらう。小説は無理かもしれないが、たぶん文聯主席であり、会議では喋るだらう。33のテーマについて、話すか、あるいは雑文を書いて、問題を解決するだらう。彼はきっと話すことがあるし、話すに違いない、しかも勇み立って」(原載は『毛沢東思想万歳』、毛99年による、253-254頁)。「33のテーマ」というのは、このとき、官僚主義、主観主義やセクト主義を批判するために列挙された課題であった。

さらに2日後の3月10日、『ジャーナリズム出版界代表との談話紀要』においても、魯迅に触れている。

「ある人が、魯迅がいま生きていたらどうなっているか、と尋ねた。私が思うに魯迅が生きていたら、書こうともするし、書こうともしない。正常でない雰囲気では、彼も書かないだらう。しかしより多くは書くことがありうる。ことわざが言い当てていよう。「身を捨つるのも厭わず、皇帝を馬から引きづりおろさん」。魯迅は本当のマルクス主義者であり、徹底した唯物論者だ。本当のマルクス主義者、徹底した唯物論者は恐れるものがないので、書くのである。いま一部の作家が書こうとしないのには、二つの状況がある。一つは

我々が、彼らに書こうとする環境を創り出していない、やられるのではないかと思わせていること。もう一つは、彼ら自身が唯物論に精通していないこと。徹底した唯物論者ならば書こうとする。魯迅の時代にやられるとは、牢屋に入れられ、首を切られることだが、魯迅はそれでも恐れなかった。いま雑文をどう書くか、まだ経験がないので、私が思うに魯迅を運んできて、みんなに彼を学んでもらい、しっかり検討してもらおう」(原載同上、毛99年による、263頁)。

この時期、毛沢東が指示した「百花斉放、百家争鳴」は、両側から抵抗に出会っていた。一つは劉少奇や『人民日報』編集長だった鄧拓たち共産党主流であり、一つは呼びかけられた民主党派や党外の知識人たちであった。毛沢東はこのとき、共産党に対する批判を求めて「整風運動」を企図したので、後者にとっては、いままでの抑圧の経験から、すぐに呼応する雰囲気はなかったのである。おそらく「正常でない雰囲気」というのが、彼らの本音であっただらう。その意味で、毛沢東にとっては、知識人たちに書くように煽る必要があり、この時期に魯迅を引き合いに出したのであった。まさしく、「魯迅を運んでこよう」としたのである。

つまり謝泳や陳晋の主張によれば、ここにある「魯迅が生きていたら、書こうともするし、書こうともしない」とか「牢屋に入れられ、首を切られる」というような表現が、羅稷南に誤解され、あるいは周囲の者に誤伝されて、今回のエピソードができあがってしまったのではないか、というのであった。

ただし陳晋によれば、毛沢東57年の上海滞在のうち、7月7日の上海科学、教育、文化、芸術および商工界代表人士との座談には、羅稷南の名が入っている。これはこの年に羅と毛が会見しえた唯一の機会であった。しかし、陳晋はこの場には共産党上海市委員会の指導幹部数名も加わってい

たから、「反右派」の緊張した時期にあって、「人を脅かす性質を潜めていた」質問などできるはずはない、と可能性を退けている（葛濤編03年、423頁）。

むろん、逸話が事実だと再反論する意見や証言もあい継いだ。謝泳、陳晋の論考と前後して、羅稷南のおい陳焜が、おじの人柄を回想しつつ、同じような話を直接聞いたことを発表したのである（同上、438－444頁）。また周海嬰が逸聞を聞いた当人、羅稷南の教え子である賀聖謨も、周の記述の誤りを訂正し、しかし大意に相違はない旨を表示した（同上、447－448頁）。少なくとも、証言は複数となり、事実関係については、膠着状態に陥ったといってよい。

こうしたなか、当時、現場にいて二人のやりとりを実際に耳にしていた、黄宗英（1925－）がこの年の年末、新たに目撃証言をしたのであった。彼女は著名な映画俳優、趙丹（1915－80）の夫人で、彼女自身も役者であったため、57年7月7日の座談会に夫婦で加わっていた。彼女は羅稷南の近くに座っており、魯迅をめぐる毛沢東との問答を聞いたというのだ（同上、453－457頁）。

黄宗英の文章からは、修辞の過剰な文体といい、この発表の件で法律的問題はないかと弁護士に尋ねたという記述といい、おずおずと思慮深くではあるが、目撃証言の社会的責任は取らねばならないという苦悩の情感が伝わってくる。これを虚偽だというわけにはいくまい。彼女の文章には、人民共和国で長く生活してきた文化人の心情が反映されていよう。自分の言動によってどんな仕打ちがなされるか分からないというトラウマが刻まれているようだ。ともかく、深い歴史的な意味や細かい差異は別として、大まかな事実関係としては、これで決着がついたと言うべきだろう。

ただし、最初の周海嬰の記述について、明らかな誤りは訂正しておかなければならない。羅稷南は湖南出身ではないし、この座談会は同郷の集ま

りではなかった。周谷城は全人代に出席していて参加しようもなかった。また羅が「心の中にしまい込み、誰にも漏らさなかった」というわけではなく、健康なときに、信頼できる周囲に話していたことなどである。

さて、くだんの座談会の現場の状況を黄宗英、陳焜、賀聖謨などの証言をもとに再現してみよう。若干の脚色が入ることはご了承願いたい。

Ⅱ. シナリオ風に

1957年七夕の日、7月7日の夕刻、上海の中ソ友好大厦に、40人近くの人々が三々五々集まってきた。人々はどこか沈鬱で緊張した面持ちだったが、建物の中にあるさほど広くないティールームに設えられたいくつかの小さなラウンドテーブルに、静かに座っていた。円卓の座席は特に指定されず、どこに座ってもよかった。この頃は、指導者との接見は割とフランクで、一見したところ気さくな雰囲気であった。とはいっても、そもそもここに集められた36人は、前触れもなく、いきなり来るよう指示されたのである。しかも目的は、ときの権力者毛沢東が接見する座談会というのだ。

本来なら光栄というところだろうが、この時期は違っていた。つい数ヶ月前まで、知識人たちは、共産党に対する官僚主義やセクト主義を批判して、自由に発言するようさかんに求められていた。それが党の「整風運動」を助けることになるという理屈であったから、それに応じて今までなら呑み込んで腹に収めていたことばを、敢えて語った人々もいたのである。

ところが、5月の半ばあたりから様子がおかしくなり始めた。「状況は変わりつつある」。6月8日には「右派分子の進攻に反撃を加えよ」というスローガンが伝えられた。しかも、自由に批判的言論をしてよいという「百花斉放、百家争鳴」という政策自体が、蛇を洞穴から誘い出す「陽謀」

だというのだ。ちょっと前まで、以前とは違って自由闊達に議論する空気があったが、たちどころにしぼんで、萎縮してしまったことは言うまでもない。

「百花斉放、百家争鳴」が唱えられていた時期に、短い文章を書いて公表した人はいくらでもいた。文字にしなくとも、会議や人前で批判的な言辞を語った人はもっといたのである。このとき、誰しもが自分に何がしか災いが降りかかるのではないか、誰かがあのときの自分の発言を覚えていて、党に上申するのではないかと疑心暗鬼になっていた。こんな時期、毛沢東がいったい何のために座談会を開くのか、何を言いたいのだろう。いや逆に指名されて、何か発言を求められたら、いったいどうしよう。集められた人々は、不安な気持ちをかき立てられていた。

沈黙のなか、ぴりぴりした空気が会場を威圧している。そのとき上海市党委員会の幹部を従えて、太った大柄の男がゆったりと、大股の歩き方で入ってきた。初めて会う者にも、それが当の毛沢東であることはすぐわかった。

彼は黒い扇子を手にししながら、にこやかな笑みを浮かべて、会場を見回している。正面の二つ三つのテーブルは映画界の関係者が占めていた。その一つに、有名な俳優趙丹と黄宗英夫妻、それに映画監督の応雲衛、さらに翻訳者として名の知れた羅稷南などが座っていた。

毛沢東は、ほとんどの人と知り合いであるかのようにだった。映画関係者のテーブルに近づくと、気さくな様子で「王人美の父親はわしの教師だったが、役者王人美は来ていないのか」と声を張り上げた。いつもの湖南訛りの強い調子である。お付きが「王人美は来ていませんが、女性作家の王元美は来ています」と答えた。王元美が慌てて立ちあがり「来てはまずかったのでしょうか」と言った。毛沢東は「いやいや、女性作家の王元美同志を歓迎しますよ」と言うと、周りから拍手が起

こった。

お付きが毛沢東に、来会者の名簿を渡すと、彼は扇子を置いて名簿に見入った。ある名前を名簿に見つけると、会場をまた見回す。近くに羅稷南を見つけるや、たいそう嬉しそうであった。羅稷南の方から一步近寄って、毛沢東と握手をした。まるで久しぶりに再会した旧知のようである。毛沢東は趙丹たちの座っている方に移動し、趙丹夫妻の側、羅稷南とは斜め向かいに腰を下ろした。

「瑞金で一別以来かな」毛沢東が懐かしげに語った。羅稷南はかつて、蔣介石に対抗した、1933年の福建人民革命政府に関与していた。そのころ当時の広西ソビエト革命根拠地との提携を模索するため、使者として瑞金を訪れたことがある。そのとき二人は面談したことがあったのだ。四半世紀近く前にもなるのだが、二人とも人生の苦境のなかで出会った仲であった。

「君が『マルクス伝』を訳してくれたことに感謝するよ。中国人民にとって大きな貢献だ」。毛沢東はそう付け加えた。人民政府崩壊後、羅稷南は上海に戻り、閉戸読書して翻訳作業に没頭した。メーリンクの『マルクス伝』は、彼の訳業の一つである。さらに毛沢東は尋ねた。「いまはどうかね。何か困ったことでもないか」。

「いまは……」と少し躊躇して、羅稷南は聞いてみたかったことを、この際やはり聞いておこうと決意した。「主席、いつも悩んでいる問題が一つあるんですが、もし魯迅がいままだ生きていたら、どうなっていたでしょう」。

側にいた趙丹夫人の黄宗英が肝をつぶした。確かに胡風事件以来、こういう話題が周囲で出ることとは度々あった。だがまさか、「反右派」のこの危険なときに、その指揮をしている当事者、それも最高権力者にそんなことを聞くなんて。

羅稷南はもとより、毛沢東の3月の講話のことまでは知らなかったはずである。とはいっても、黄のいうように、建国以来の知識人の歴史を振り

返れば、国民党政府に対して過激な反体制的言論をした魯迅に自分たちの運命をだぶらせ、思いを馳せるのは当然であった。まして魯迅の弟子や秘書というべき人々が、次々と失脚させられていたのである。

さらに、この年春にはさんざん発言を強いられ、けしかけられ、それに乗ったとたん、手のひらを返したように、いま右派と非難されている。彼にとってこのとき、魯迅という固有名詞は、現代中国知識人のシンボルでもあったろう。

毛沢東にとっては、当然3月の講話が思い出されたに違いない。彼は自分から、魯迅が生きていたら、という仮説を立て、唯物論者魯迅なら、きっと書くに違いないと述べて、知識人たちを鼓舞し促したのだ。それを忘れてはいるはずがない。まして、その魯迅を延安時代以来「現代中国の聖人」に仕立て上げたのも彼自身であった。

だからこの問いが、周海嬰のいうように「人を脅かす性質が潜んでいる」としたら、それは二重なのである。一つは、危機に瀕している中国知識人の運命を問いかけたこと、それは「反右派」という時期にはなおさら、本質的な問いではあるが、本質的であるがゆえに、知識人にとって危険であった。

もう一つは、毛沢東にとって、大きな矛盾を指摘することになるということである。あなたの言う「聖人」が生きていて、あなたの指示通り批判的発言をしたら、いまあなたは彼をどう処遇するのですか。それは、毛沢東に対して、匕首式の言説となるに等しい。

それまでのなごやかさが消えて、瞬間、緊迫した空気が流れた。毛沢東は真剣にしばらく考え、「魯迅ね——」そう言って、わずかに身体を揺すぶる。そしてはっきりと明朗に、つぎのように答えた……。

この返答のことばは、当然のことながら、黄宗英、陳焜の証言、それに周海嬰の記述それぞれで

微妙に異なっている。黄は「囚われの身で自分の書き続けているか、一言もいわないか、どちらかだろう」（葛濤編03年、456頁）。陳は「たぶん囚われの身にならないのであれば、言うのをやめるだろう」（同上、439頁）。周の記述にある「大局を察して」という一句は、二人の証言にはないのだが、大意にさほど影響はないと思われる。

これを聞いて、身重であった黄宗英はお腹の子が飛び出してしまうほど、びっくりした。だが周の述べるように、羅稷南が体中冷や汗をかいたという記述は、黄はしていない。呆然自失の彼女に対して、「羅稷南と趙丹が目と目で暗黙の了解をしているのがちらっと見えた。彼ら二人は泰然と理解したのだ」（同上、456頁）と述べている。こうして2時間ほどに亘った座談会のうち、時間にしてたった1分にも満たない毛沢東と羅稷南の問答は、終わりを告げた。ここの関係性の解釈は、なかなか微妙にしてスリリングだろう。毛沢東論としても、現代中国知識人論としても。

Ⅲ. 悍馬ロシナンテ

それにしても、こんな大胆な質問をした羅稷南とはどういう人物であろうか。本来はきちんと資料を探查すべきだが、ここは手元の材料と既述おの陳焜の文章（葛濤編03年、438—444頁）にもとづいて、分かる範囲で述べておく。

羅稷南は、本名を陳小航または陳子英という。雲南省鳳慶の出身で、1918年に北京大学に入学、23年に同哲学系を卒業した。在学中最も師事したのは、梁漱溟であったとか。また哲学系の1年先輩で、のちに詩人グループ沈鐘社の結成に参加し、建国後は北京大学中文系の大黒柱となった楊晦（1899—1983）とは親密な関係であったという。

卒業後、最初は東北で教師となり、さらに雲南に戻って、楚図南（1901—？）とともに教育事業に携わった。この時期に育成し、長い交友関係をもった学生に艾思奇（1910—66）がいる。

しかしもともと、書齋の人ではなかったらしく、国民革命時代は、地元の雲南や広東に影響力を持っていた軍人陳銘枢（1889－1965）の宣伝科長になり、30年代には、その関係もあって、十九路軍のスポークスマン兼秘書となり、上海事変に戦った。そのまま十九路軍の蔡廷鍇（1892－1968）に従って秘書となり、既述のごとく福建人民革命政府に参加する。このとき広西ソビエト革命根拠地を訪れ提携を図って、衣服や食塩、医薬品の援助協定を結んだ。毛沢東と会ったのがこのときであったのは、上に述べたとおりである。

福建政府が崩壊したのちは、上海に居を移して、政治の第一線からは身を引き、翻訳者として名前を残すことになる。ところで羅稷南は翻訳者としてのペンネームであった。これはかつての上司の蔡廷鍇が、痩せてひょろりと背が高いところから、たぶんその行動も与ってのことだろうが、セルバントスのドンキホーテに譬えられていた。その周りを支えた彼には、ドンキホーテ騎乗の愛馬、ロシナンテのあだ名があったのだそうだ。ドンキホーテはロシナンテを駿馬と思いこんでいたが、実は骨と皮の駄馬でしかない、そんな悲哀と苦悩を込めて、これをペンネームにしたとか。羅稷南はロシナンテの音訳である。

翻訳には、既述『マルクス伝』のほか、ディケンズ『二都物語』、ゴーリキー『クリム・サムギンの生涯』やエレンブルグ『暴風雨』など多数に上る。おいの陳焜にも、外国語は人に別の両眼、舌、頭脳を持たせるから、必ず学ぶようにと諭したという。

また日中戦争中は、読書生活出版社の運営にあたり、このころ許広平と近所付き合いを始めて、親しくなった。上海では日本軍占領の際、許広平と一緒に羅稷南夫妻が日本軍に拉致逮捕されるという事件も起きている。周海嬰が世話になったというのは、この時期であろう。さらに抗日戦勝利後は、国共内戦に反対して、許広平、馬叙倫たち

と『民主』や『周報』などの刊行物を出版したし、民主促進会の発起人でもあった。政治の第一線は退いても、言論出版では退いたわけでもないようである。

人民共和国建国後は、1950年に毛沢東の書簡を得て、雲南に帰り、西南軍政委員会委員になるよう勧められたらしい。辞典的記述によれば、その任に着いたことになっているのだが、陳焜の回想では「辞退もせず、着任もせず」だったと記述されている（同上、440頁）。この辺は、さらに調査が必要であろう。というのも、陳焜によれば、羅稷南は建国後の上海では、「比較的自立した身分を確保していた数少ない一人」（同上、440頁）であったというのだ。同じく教え子の賀聖謨も「解放後ずっとフリーランスの翻訳者で、上海文芸出版社の編集翻訳局から毎月120元の「交通費」をもらっていただけ」で「ふだんは出勤に及ばなかったし、たまに会議に出た程度だ」（同上、451、480頁）と述べている。

履歴としては、さらに中国作家協会会員で、上海分会の理事、同書記処書記という肩書きがあり、上海市の人民代表に五期連続して選ばれてもいる。これらの辞書的記載と実態との関係は、もう少ししっかりした検討が必要となろう。

彼の剛直さは、親族や教え子の回想という点を割り引いても、逸話にことかかない。1960年に上海作家協会では、人道主義に対する批判大会が数十日も続いた。これに彼が参加していた、ということから、作家協会に関係していた点は事実だろう。批判がピークを迎えたとき、彼は立ちあがって、「人道主義は良い点もある。自由勝手に批判すべきではない」と述べ、周りはあっけにとられてしまったとか（同上、442頁）。

そんな態度のせいで、批判肅清や文革のときには、耐え難い屈辱を受けた。陳焜が、喋るのをやめてじっとしていたら、と勧めると、おいをしばらく見つめて「私は世の隅々を歩きまわったから、

そういうことは知っているが、いい加減に済ませるわけにはいかないし、そうしたくないのだ」と語ったという（同上、443頁）。毛沢東との問答の結果「体中冷や汗をかいた」という周海嬰の「補足」は、憶測というか、自分の器で他人を量った記述のようにも見受けられる。

私が注目するのは、文革の予兆を告げた『海瑞免官』批判のとき、羅稷南が語ったとされる発言である。「農民起義は暴乱である。前人の統治権を継承して、これに取って代わるのは、起義ではなく、革命でもない」。「労農兵の文化的素養は高くはないので、彼らの意見を決して正統として扱うべきではない」（同上、443頁）。また羅稷南は、毛沢東の著作のうち、『八股文に反対する』『本本主義に反対する』を好んでいて、硬直したイデオロギー的言説を嫌ったともいう（同上、442頁）。

これらは回想に基づく断片であるから、簡単に結論を導くべきではないが、毛沢東とは異なるある種の理性的なマルクス主義の傾向を感じさせる。陳銘枢が社会民主党を組織したということからして、私としては、仮説として、社会民主主義者であるとか、トロツキスト的であったとか、推定したくなる誘惑に駆られる。なおこれについては、長堀祐造氏に確認したが、まったくそういう情報はないそうだ。さらに予断を付け加えておけば、中国における剛直な、硬骨の自由主義がありうるとしたら、個性も合わせて、羅稷南のような人物に種が播かれていたのではないか。彼の建国後の自由人のような生き様や断片的な発言が証しているだろう。毛沢東的な革命観とは異なる世界観、社会観の可能性と、自由主義的な抵抗の芽がそこにあるような気がするのだ。トロツキストとして粛清された延安の王実味などとともに。

IV. 現代知識人にとっての魯迅と胡適

さて問答の真偽については、ほぼ決着が着いたといってよい。しかし、その解釈や奥行きをめぐ

って、論争は継続された。「毛沢東が、魯迅を「お上に抗した」ため「囚える」ことがありうるかどうか。筆者が思うに、あろうはずもない！」（葛濤03年、483頁）と秋石がいうのは、まこと往生際の悪い発言である。

また陳漱渝はこの論争と前後して、多くの作家や知識人が「中国新時期に魯迅〔の神聖化〕に挑戦した側面は多いけれども、焦点となっているのは、毛沢東の魯迅に対する上述の『『新民主主義論』における〕評価を消滅させ、転覆することにある」（同上、477頁）と述べていた。これらはもとより、魯迅の地位を守る立場からの発言である。黄修己はそれを引き合いに出し、この問答が史実として高い価値があるとともに、毛沢東自身が自分で、その評価を消滅させ、転覆した事例だとしている（同上、463頁）。

確かに、この問答には奥深い射程が隠されている。しかし、ここまで話題にしておきながら言うのも変だが、この問答が毛沢東の魯迅観とか魯迅の共産党政権に対するイメージとかにどの程度関わるか、といえ、その意味ではたいした史実ではないのではないかな。

私は、毛沢東が魯迅に対して「酷評」（同上、466頁）を下したとは思えない。毛沢東の回答は、魯迅が状況のなかでことばを選択し、激しい言辞も厭わなかった反面、場合によっては沈黙も甘受した「塹壕戦」の態度をよく理解している、と言えるのである。毛沢東の問答における回答は、「書こうともするし、書こうともしない」という3月の魯迅に対する見解とも、一定程度符合していると言ってよいだろう。

それとともに数カ月前に、魯迅の雑文を称揚した自分の言動が相対化できている、という見方が可能であろう。私には、羅稷南の問いのなかに、大胆さと憤りが隠されている、とすれば、彼の問いかけに対して、正面から誠実に回答しようとする毛沢東の態度も読みとれると思われるのだ。

「すぐには答え」ず、「しばらく考えてから言った」という陳焜の証言は、彼がこの問いを真剣に受け止めたと、考えてよいのではなかろうか。

確かに毛沢東に、矛盾がないわけではない。延安において、丁玲や蕭軍が「やはり雑文の時代だ、魯迅の筆法が要るのだ」と言ったとき、彼は、雑文は敵に対する鋭い批判なのだから、「同志を敵とみなすならば、自分を敵の立場に立たせることだ」(『文芸講話』)と述べて、「解放区」における雑文を否定している。その雑文と魯迅の筆法を、今度は一旦は「整風運動」に運用しようとし、しかもあつという間に、発言者を弾圧する手だてに転じたのだから、ご都合主義的だと言われても致し方なかろう。

だがそれは政治家として、毛沢東の一面である。だから秋石のように、毛がいかに魯迅マニアであったかを語っても(同上、482頁)、それは別のレベルの問題であるし、この問答における回答には、政治的判断よりも、むしろ毛のマニアぶりが発揮されているとも言えるのだ。一方逆に「百花斉放、百家争鳴」から「反右派」への転換を初めから、毛沢東の策略だと考えるのも、結論を急ぎすぎているのではないか。

范偉はこの点に関してつぎのように語っている。「視野を少し広げて、「双百」[「百花斉放、百家争鳴」]方針の提唱、貫徹のプロセス全体に着眼すると、それでも毛沢東が「双百」を提唱したには、誠意がないわけではなかったことが理解できるのである」(同上、471頁)。私も基本的にこの考えに近い。毛沢東が魯迅マニアだという観点からすれば、既述57年3月の魯迅への言及と今回の問答は、むしろそうした推定をかえって補強することになるだろう。毛沢東は魯迅が好きだから引用したのだ。マニアであったから、ごまかしたり、おだて上げたりして、踏みつけにしようという返答はしなかったのではないか。

それにしても、陳漱渝の主張は私には不可解で

ある。彼にとっては、魯迅というより、毛沢東の魯迅評価を守ろうとしているように見える。「毛沢東が魯迅を偉大な文学者、思想家、革命家と称えたのは、現在でも全体として正しいし、毛沢東個人の歴史評価の変化によって変えるべきではない」(同上、477頁)。

毛沢東が『新民主主義論』で行った例の規定のことである。私はこの魯迅評価にあまり賛成ではないけれども、かりに陳漱渝がそれを正しいと判断したなら、毛沢東に依拠する必然性はまったくあるまい。それが陳漱渝の魯迅論ならば、毛沢東が何を言おうと、どんな問答が事実として存在していようが関わりのないことではないか。魯迅研究の側から、実証すればよいことであろう。だから陳漱渝が守ろうとしているのは、両者の関係なのではないか、と穿った見方すらしたくなるほどである。そこに、中国における知識人と政治的言説との深い関わりが感じられるだろう。一つの問答は単に過去の解釈なのではなく、現在の権力とも濃厚に関わっているという気がするのである。

さて論争の初期に、問答の事実そのものに疑いを挟んだ研究者には、ほかにも謝泳がいた。彼は1998年に、魯迅をめぐる別の論争でも、問題提起をしていたのである。謝泳は、林賢治『この世の[人間]魯迅』を書評する「魯迅研究の謎」(謝泳編、03年)または「魯迅はどのように利用されたか」(陳漱渝編、02年)のなかでこう語っている(なお後者は前者の抄録である)。

「戸惑いとは、なぜ魯迅は反体制を基調に追い求めたのに、いつも独裁に利用されたのかという点である。魯迅の悲劇は生前ではなく死後にある。彼は、新時代において否定されなかったほとんどたった一人の中国近代知識人であった。これはなぜなのか。「私たち新社会の赤旗のもとで生まれた者は、魯迅の書を読みながら育ったと言ってよい。だがなぜあの中国が最も暗闇であった時代に、魯迅を読んだ紅衛兵は、最低限の人道主義すら理

解していなかったのか」。(謝泳編03年, 19-20頁。陳漱渝編02年, 314頁)。

このような疑問そのものが、魯迅を神聖化してきた中国近代文学研究に対する、異議申し立ての意味を持っていただろう。また魯迅と毛沢東との、単なる政治的関係を超えた暗合を示したかったのかもしれない。

ところで、魯迅と毛沢東に類比したケースとして、中国の文化界では、胡適と蔣介石の関係が取り沙汰されるようである。陳紅民「智者の千慮」(謝泳編03年, 153-156頁)は、蔣介石が戦後の国共内戦のなかで、いかに胡適を取り込もうとしたのか、という経過を検討している。陳紅民は、蔣介石は自らが大統領になったのでは、行政的権力を行使できないと判断し、また胡適の名声によって政府に文化的権威を与えようとして、胡適に大統領候補を要請した事実を述べる。そして陸鏗の回想を用いて、胡適はそれまで在野の「諫言役」に徹すると言って、政府への参加を固辞していたのに、大統領候補については、なかなかその気があったことを語っているのだ。「『政府のしゃっば』はならないほうがましだが、『政府のしゃっば』は別だったのである」(同上, 156頁)。

これに対して、既述謝泳その人は「このように胡適を理解してはならない」(同上, 171-178頁)において、きわめて実証的な手法にもとづき、胡適の日記記述を用いて、これに反論を加えている。毛沢東が羅稷南に対して、真剣に対応したのと同様、謝泳は、蔣介石も胡適も真剣に事態を考慮し、自らの意志を貫いたのであって、ペテンや裏はなかったのだと主張しているのだ。謝泳の論考自体は、史料に基づき、きちんとした説得力をもっていることは間違いない。

そこで彼は、現代中国の文化界にいまだに自由主義知識人に対する偏見があることを批判して、こう語っている。「中国近代自由主義知識人に対し見方のある人の多くは、つねにあれこれ理由を

探して、これら知識人の身分の自立性を否定しようとし、彼らの自立性が虚偽であると思っているのだ」。「胡適と溥斯年の一生の政治的選択から言って、彼らの自由主義の立場は変わることがなかった」(同上, 173頁)。この主張は、理解できるものであろう。

とはいうものの、ここには奇妙な構図が出現する。謝泳が蔣介石と胡適を論じたことと、魯迅研究の謎を提起し、毛沢東と魯迅をめぐる問答の論争に介入したこととは、まったく独立したアカデミックな関心だと言えるのだろうか。謝泳は、先の問題をめぐると真偽論争において、陳漱渝や秋石とまったく同じ論理と立場に立ったのだが、これはたまたま利害が一致しただけではないのか。彼らにとって、毛沢東は魯迅の賛美者であってほしかったために。

謝泳は魯迅の論争に参加する一方で、胡適とそのグループを取り上げ、自由主義知識人の伝統を描き出していた。そのこと自体がどうも魯迅の神聖化に反対することとも関わりがありそうだなと言えよう。つまり現代中国の文化界では、ちょうどコインの裏表のように、毛沢東と魯迅を取り沙汰することは、片方で蔣介石と胡適の関係を問題視するよう仕組まれてくるようなのだ。

胡適については、人民共和国建国後、毛沢東が北京図書館館長として招こうとして、中共の地下黨員が、胡適の遺留工作をしたといういきさつも指摘されている(同上, 138-139頁)。そこで、問答をめぐると論争にもこんなことばが残されていた。「毛沢東は[……]魯迅のポストに文聯主席の椅子を用意していた(これは胡適がもどってきたら図書館長にしてよいと彼が考えているより、地位はずっと高い)」(葛濤編03年, 461頁)。

人文学の研究が、すべて独立したアカデミックな関心に基づくのは無理であろう。それはむしろ常に、何がしか「政治的」な意味合いや「権力的」な意味合いを伴うことだろう。問題はそのなかで

争われている内容と質である。

V. エピローグ

私は、身を寄せていた北京日本学研究センターで、昨年の秋に、魯迅の1933年に関する話をした。そのとき日本語の原稿を配ってあったのだが、日本語の堪能な研究者から胡適に対する考えを質問され、そのうえで魯迅の革命に対する態度を問われた。それは私がこう書いていたからである。

「ロシア革命のとき、貴族が自分の子供が殺されるのを見て騒ぐのを、農奴たちは理解できなかった。「奴隷たちは犬や豚のように扱われているのに慣れているので、人間が犬豚と同じだとしかわからないのだ」(『偶成』)。このとき語りが一瞬、貴族の視点の側にいないと、どうして言えるだろうか」(拙稿03年, 251-252頁)。

最後の否定の疑問文が誤読されたようで、魯迅は貴族の子供を殺すのを肯定しているのではないか、という質問であった。

それから2カ月ほどたって、今度は魯迅博物館で、魯迅と当時の青年や編集者との関係について、やはりその時期を扱って、中国語で話をさせられた。魯迅が『申報・自由談』に原稿を送ったその日に書いた書簡に、「自由談にはずっと書いていません」と述べていたことを枕に、魯迅から見えた当時の文壇の状況を述べた。それを活字に発表する際、私が魯迅のことばは「真っ赤な嘘だ」と書いた部分を、「事実ではない」とするよう修正を求められたのである(拙稿04年, 56頁)。

いずれも瑣事であろうから、いちいち事挙げする必要はないのかもしれない。しかし現代中国の文化界で、胡適と魯迅をめぐる話題が、胡適びいきと魯迅びいきとの間で、ナイーブとなっている一端は、鈍感な私でも感じとることができた。拙稿はそんな雰囲気や端緒としたものでもある。

そして、一連の「波乱」における思考の不自由さ、というか不毛な感覚が、私の気持ちを重たく

させた。その感覚が強くなるほどに、「反右派」の緊迫した雰囲気の中で、毛沢東に向かって「人を脅かす性質を潜めていた」問いかけをしたロシナンテ＝羅稷南の影が、却って大きくなっていくように思えるのである。

2004年5月8日

[参考文献]

陳漱渝主編『誰挑戰魯迅 新時期關於魯迅的論争』四川文芸出版社, 2002年。

葛濤編『魯迅五大未解之謎——世紀之初的魯迅論争』東方出版社, 2003年。

毛沢東・中共中央文獻研究室編『毛沢東文選』第7巻人民出版社, 1999年。

丸山昇「最近の魯迅論議から考える」(上)(下)『季刊中国』第75, 76号, 2003, 04年。

代田智明「魯迅は共産党がお嫌!?!」『中国研究月報』第56巻2号, 2002年。

「一九三三年・上海・魯迅の筆法」『岩波講座 文学』第10巻, 2003年。

「1934: 作為媒介者的魯迅」『魯迅研究月刊』第262期, 2004年。

謝泳編『胡適還是魯迅』中国工人出版社, 2003年。

周海嬰『魯迅与我七十年』南海出版公司, 2001年。

[補]

拙稿校正中に丸山昇の新稿「もし魯迅が生きていたら」『公孫樹人』第3号(2004年)を拝読する機会を得た。私としては既出丸山前稿(2004年)を含めて、いくつか気になる点があるのだが、紙幅の関係もあり、これについては別の機会を待ちたい。